

二十歳、就職活動をしていた頃です。

当時私が住んでいたのは、通っていた短大に隣接した女子寮でした。

その時期、十数台ある電話には常に学生が列をなして張り付き、それぞれが互い違いに、見えない相手に向かってお辞儀をしたりしていました。

仲間うちではまだ誰も吉報を運んでこない中、列に並んでいた一人が疲れたように言いました。

「ねえ、初めてのアポ取るときの電話って、敬語難しくない？」

「ハアーともフウーとも聞こえる同調のタメ息が一斉にもれました。

「そうなんだよなあ。普段使ったこともない敬語って、名詞ごと変わるものもあるよね。」

「動詞もだよ。『行く』は『伺う』だし……。マニュアル外のこと答えなきゃいけない時、パニックになって、珍妙な敬語になるし……。」

「例えば？」

「私、『ございます』と『なさる』が合体して、『ござる』っていつちゃった。」

まさに電話中の前列に聞こえないよう、皆で声を殺して笑っていると、ふと一人が真顔になりました。

「そうだ。みんな『後日またかけてもいいか』って聞く時、何て言ってる……?」

「うーん。これ、私もいつも悩むんだわ。『後日またかけさせていただいてもよろしいですか』……って、なんかへりくだりすぎて、かえってわかりにくいよね。」

『後日かけさせていただきたく……』だと、続くのは『候』しかないよね。」

つい声も大きくなり、回りの子に「うるさい！」と叱られるほど、ああでもないこうでもない、協議している声の隙間をかきわけて、スツと一本ピアノ線を張ったような落ち着いた声が聞こえました。

「では、後日改めてお電話さし上げます。お時間をいただきましたまして、ありがとうございました。」

チン。

彼女が電話を置いた時、回りがワツと騒然となりました。

「すごいー！自然。マニュアルとは違うよね」

「ふむ、『ひびく』って上から目線じゃないっ。」

「あなたがちそうでもないよ。『さし上げる』は、『さす』に敬語としての『上げる』をつけた言葉じゃないかな。」

「うん。マニュアルの『貴重なお時間』より『お時間いただきまして』と、もうもらってしまったことに対してのお礼を素直に言ったのも感じよかったよね。」

私たちが一斉に取り囲んだので、件の彼女は真っ赤になってしまいました。

「私、母が使ってる言葉を真似しただけなの。文法上どうか、考えたこともなかった。」

私たちは、うーんと考えこんでしまいました。進路指導室で学んだマニュアルより、彼女が話した言葉の美しさの方が強烈だったからです。

案の定、彼女に一番早く内定が、しかも数社同時に届きました。それも、希望していた営業ではなく、ほとんどが会社の顔となる総合受付か秘書としてです。

各社の面接官はいち早く、彼女の身に付いた言葉の美しさを見抜いていました。

私たちはこぞって彼女に弟子入りを申し出ましたが、控え目な彼女は両手をこすり合わせて、

「おこがまして・・・」

と、これまた聞いたことのない、されども何となく意味の伝わる美しい言葉で断ってきました。

仕方なく弟子入りはあきらめたけれど、どことなく他と違う彼女に魅力を感じた私たちは、その後何かとくっついてまわって、たくさん話す機会を得ました。

初めは『就職のための話し方泥棒』という下心つきでしたが、よくよく彼女を観察していると、美しいのは言葉だけではなくたのだと思ひ知らされました。

言葉の美しさは、その立ち居振る舞いの美しさに連動していました。そして、それをより魅力的に映すのは、誠実な相手への思いやりでした。

彼女の言葉が美しくて回りが惹かれたのではなく、彼女の誠実さが美しい言葉に現れて、周りを魅了していたのです。

「言い換えれば、私たちもみんな綺麗な言葉使えるようになるってことだよね。」

ポジティブな一人の声に苦笑いが漏れましたが、心の中では皆同じことを考えていたでしょう。

「そして、たくさん話すこと。」

話すことで相手を知り、知った相手を気遣う言葉が美しくないはずはありません。

相手を思っって使う日本の言葉は、多彩な色を含み、その人に添うように優しく包みます。

たくさん話し、たくさん思い合った私達にもそれぞれ内定というご褒美が届いたのは、売手市場の時代も助け、それからすぐのことでした。

あれから二十年以上経ちますが、あの時の仲間は今、気づけば皆当時の彼女に似た話し方をするようになってい

